



こーひーぶれいく

B・M・WのM

松崎 浩之

Matsuzaki Hiroyuki

もう30年以上も前のことになる。私がまだ学生だった頃、父の友人が「僕はね、B・M・Wが好きなんですよ」と言った。車のことかと思ったら、「ベートーヴェン（ブラームスだったかもしれない）、モーツァルト、ワグナーがね」と続いた。父の友人だからほとんど他人なのでどうでも良い話なのだが、私の場合だったら、Mはマーラーかな、なんて思う。当時はそう思ったし、今もそうだ。

初めてマーラーの音楽を聴いたのは、中学生の頃だった。第1交響曲（通称「巨人」）だった。当時、私はガチガチの“陰キャ”クラシック少年で、それも極端に古典派に偏っていた。そんな私にとって、マーラーの響きは新鮮だった。新鮮すぎて始めは拒絶感すらあった。幼気な少年がそれまでに築き上げてきた「クラシック音楽」という世界の秩序が壊される危機感、とでも言おうか。だって、カッコウが4度で鳴くんだよ。

ルキノ・ヴィスコンティの「ベニスに死す」という映画には全編を通して第5交響曲のアダージェットが流れているのは有名だ。映画の主人公は最晩年のマーラー自身をモデルにしている。仕事に疲れ切ったマーラーが避暑地のベニスで、見知らぬ美少年にほのかな恋心を抱く。こう書くと、キモいおっさんみたいだが、映像と音楽によって、何とも言えぬ結晶のような美しさが迫ってくる。このアダージェットにはピアノ編曲版がいくつかある。下手の物好きで実際にピアノでぼつぼつと音を鳴らしてみる。するとその和音の美しさに思わず感動してしま

う。こんな音の組み合わせをどうして思いつくん
だ？やっぱりマーラーは只者ではない。

第8交響曲は声楽付き、合唱付きの壮大な曲で、ゲーテの「ファウスト」からテキストが取られている。2部構成で、もはや交響曲の体をなしていないが、第2部（第2部だけで50分くらいある）前半の神秘的な雰囲気といい、感動的な合唱のフィナーレといい、第2交響曲の特に第5楽章との共通項がありそうだ。ただ、第2番では、明らかに天界への賛美があった。第8番は、ファウスト…悪魔の話か？マーラー自身は、第8番のフィナーレを「エロスの誕生」として構想していたらしい。ヘレニズムの香りも漂ってくる。

グスタフ・マーラーは1860年、ユダヤ人の父母から、当時オーストリアに併合されていたボヘミアで生まれた。後にカトリックに改宗する。彼自身の言葉で、「オーストリアにあってはボヘミア生まれ、ドイツにあってはオーストリア人、世界にあってはユダヤ人として、三重の意味で故郷を持たない」とある。そうした流浪人としての意識が、時には自然への回帰、時には東洋への憧憬（交響曲「大地の歌」では中国の詩がテキストに使われている）として音楽に表出していたかもしれない。しかしそうだとすると、それは、（ヘレニズムにしてもヘブライズムにしても）ヨーロッパの伝統文化の上に立脚したものだ。日本人の私が「マーラーの音楽は良い」なんて言っていたって、本当に理解なんかできないのではないかな？

まあまあ、音として表出した音楽を、バックグラウンドが全く異なる者が聴いて、そこに起こる化学反応は、また1つの創造、と言えるのではないかな？そう考えて、純粋にマーラーの音楽を楽しんでいる。

私にとって、B・M・WのMはやっぱりマーラーだ。

（東京大学総合研究博物館）